

ブラインドサッカーによる学生の意識変化に関する研究

A Study on the Changes in Students' Awareness by Blind Soccer

体育学部健康科学科

小玉京士朗

KODAMA, Keijiro

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

環太平洋大学サッカー部GKコーチ

清水 健太

SHIMIZU, Kenta

International Pacific University

Football club GK coach

環太平洋大学サッカー部監督

桂 秀樹

KATSURA, Hideki

International Pacific University

Football club Head coach

体育学部健康科学科

早田 剛

HAYATA, Gou

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

環太平洋大学サッカー部コーチ

降屋 丞

FURUYA, Tasuku

International Pacific University

Football club coach

体育学部健康科学科

古山 喜一

FURUYAMA, Yoshiichi

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

体育学部健康科学科

河合洋二郎

KAWAI, Yojiro

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

要旨：本研究の目的は、障がい者スポーツの一つであるブラインドサッカー体験が、障がいや障がい者スポーツに対する意識の変化に与える影響について検討することとした。結果より、障がい者に対しての協力的意識や、障がい者スポーツの実施機会の必要に対する認識が強くなる傾向を示した。以上のことからアイマスクを着用することで容易に障がい擬似体験が出来るブラインドサッカーの体験は、障がいや障がい者の理解・促進に関与し大変有用であるが、実践する環境や提供が少ない現状であるため、今後の障がいや障がい者、障がい者スポーツに対する理解・浸透させる課題として定期的に健常者や障がい者が共にスポーツを楽しめる機会の提供や環境作りが重要であると考えられた。

Keywords：障がい者スポーツ、ブラインドサッカー、アンケート調査

I. はじめに

2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催決定に伴い障がい者スポーツは、アダプテッド・スポーツやパラスポーツなどと言った様々な名称が飛び交うほど注目がされている。その活動はリハビリテー

ションや競技スポーツだけでなく、教育関連施設（高橋, 2012, 小玉, 2017）や地域のイベント等（佐藤, 2012）において障がいに対する理解促進やコミュニケーション能力の向上を目的として幅広く実施されている。

障がい者スポーツの実践が障がいの理解、教育的効

果に与える影響について永浜ら（2011, 2012）は、大学生を対象としアダプテッド・スポーツ実施前後の比較において障がい者に対する接し方や障がいに対する認識が有意に高くなったと報告している。また松尾ら（2013）は、小学生を対象とし車椅子バスケットボールを中心とした車椅子運動プログラムの実施により、実施前では「障がいは無い方が良い」、「かわいそうだ」と言った障がいや障がい者に対する否定的な印象が実施後では肯定的な印象を持つように変化したと報告しており、障がい者に直接交流を持つことが困難な状況にあっても疑似体験で障がい者スポーツの実施により障がいや障がい者に対する理解・認知の浸透に影響することが示唆されている。

障がい者スポーツの一つであるブラインドサッカーは、人が生活する上で必要な外部からの情報の入力の約80%を占める視覚情報をアイマスクの着用により遮断し実施するスポーツである（日本ブラインドサッカー協会, 2017）。日頃使用している身体機能をアイマスクの着用により容易に障がい疑似体験が出来るため、近年では様々な障がい者スポーツの中でもブラインドサッカーの体験会を通じた障がいの理解を深める活動が散見されている（大山, 2016）。

II. 目的

本研究は、障がいや障がい者の理解を深める活動で近年実践増加傾向にあるブラインドサッカーの体験が障がいや障がい者スポーツに対する意識変化について調査することを目的とし、今後障がい者スポーツを通じた障がいの理解・浸透手法に対する基礎研究として実施することとした。

III. 方法

1. 対象およびアンケート調査方法について

対象は、本研究に同意を得た参加者25名（男子16名、女子9名、平均年齢 18.6 ± 1.4 歳）とした。ブラインドサッカーの体験実施前後に実施する障がい者や障がい者スポーツに関するアンケート調査は、大山（2017）の先行研究で用いられた項目および実施評価方法を参考とし独自に追加項目を加えたアンケート用紙を使用した。質問項目は、障がい者に対する印象について9問、障がい者スポーツに対する質問6問、障がい者スポーツの普及方法に対する質問5問の計20問とした。また質問内容において主に偏見や否定的なイ

メージについて確認をする項目が多いため、各種質問に対し「強く思う」、「すこし思う」、「どちらともいえない」、「あまり思わない」、「全く思わない」の5段階尺度を用い、選択肢の「強く思う」を「2点」、「すこし思う」を「1点」、「どちらともいえない」を「0点」、「あまり思わない」を「-1点」、「全く思わない」を「-2点」として数値化し平均値を求め比較検討した。実施前後における各質問項目の比較は、Excel統計2015を用いStudent-T test（対応あり）を行った。有意水準は5%未満とした。

アンケート調査の実施前、実施後に今回の調査の趣旨を説明し同意を得て調査を実施し、その場で回収した。アンケート用紙未記入は除外した。

2. ブラインドサッカー体験の実施方法について

本研究で実施した障がい者スポーツ体験は、視覚障がい者を対象とし実施されるブラインドサッカーとした。使用した用具は、特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会にて運営をしているストアから購入したブラインドサッカーボールと市販されているアイマスクとした。また、対象者にはブラインドサッカーの競技特性の理解も含め、日本ブラインドサッカー協会公認指導資格者に協力を頂き実施指導を行った。実施内容および実施手順は、はじめに視覚を閉じることで生じる危険性および注意事項を口頭にて指示した。その後、1. アイマスク着用下で指導者の指示条件に沿ったグループ作成レクリエーション、2. アイマスク着用下で2人1組における歩行体験、3. アイマスク着用下での周囲のアドバイスをもとに実施する歩行体験、4. アイマスク着用下での周囲のアドバイスをもとに実施するドリブル体験、5. アイマスク着用下における5m間隔のパス交換、6. アイマスク着用下で2人1組のペアを作り全体数を分割した状態でのミニゲームとした。実施時間は、アンケート調査を含め120分とした（図1）。

IV. 結果

1. 障がいや障がい者に対する意識について

アンケートの回答率は25名で100%であった。障がいや障がい者に対する意識調査項目において実施前後の点数比較で有意差は認められなかった。実施前では、「付き合いは面倒」や「一緒にスポーツをすることは困難」、「スポーツの実施は危険である」、「一人では何も出来ない」、「暗い感じがある」、「かわいそう



図1. ブラインドサッカーの実施内容

だ」に対し、否定的な意識の傾向を示した。また「自分には障がいが無くて良かった」や「生活するのが難しい」、「困っているときは助けてあげたい」は肯定的な意識の傾向を示した。

実施後では、「暗い感じがある」はより否定的な意識の傾向を示したが、「付き合いは面倒」や「一緒にスポーツをすることは困難」、「一人では何も出来ない」、「かわいそうだ」は否定的な意識が減少傾向を示し、「スポーツの実施は危険である」は肯定的な意識の傾向に変化を示した。「生活するのが難しい」は肯定的な意識の傾向から否定的な意識の傾向に変化した。また、「困っているときは助けてあげたい」は肯定的な意識が増加傾向を示した（図2）。

2. 障がい者スポーツに対する意識について

障がい者スポーツに対する意識調査項目において実施前後の点数比較で有意差は認められなかった。実施前では「実施していると運動能力が下がる気がする」、「格好悪い」、「つまらない」、「競技実施にて動きが無く、スポーツとして魅力がない」、「障がい者だけ実施するスポーツである」は否定的な意識の傾向を示した。「リハビリテーションの一環として実施するもの」は肯定的な意識の傾向を示した。実施後では、「実施していると運動能力が下がる気がする」、「格好悪い」、「つまらない」、「競技実施にて動きが無く、スポーツ

として魅力がない」は否定的な意識が減少傾向を示した。「障がい者だけ実施するスポーツである」は否定的な意識が増加傾向を示し、「リハビリテーションの一環として実施するもの」は肯定的な意識が減少傾向を示した（図3）。

3. 障がい者スポーツの理解・浸透方法に対する意識について

障がい者スポーツの理解・浸透方法に対する意識調査項目において実施前後の点数比較で有意差は認められなかった。実施前では「障がい者やその家族の理解が必要である」、「安心して障がい者スポーツを行う公的機関等によるサポート体制の充実が必要である」、「指導者の育成が必要である」、「障がい者スポーツに関する情報が一般的に提供されることが必要である」、「実際に実施（触れ合い）する機会が提供されることが必要である」の全ての質問において肯定的な意識の傾向を示した。実施後では「安心して障がい者スポーツを行う公的機関等によるサポート体制の充実が必要である」、「指導者の育成が必要である」、「障がい者スポーツに関する情報が一般的に提供されることが必要である」は肯定的な意識が減少傾向を示し、「障がい者やその家族の理解が必要である」、「実際に実施（触れ合い）する機会が提供されることが必要である」は肯定的な意識が増加傾向を示した（図4）。

V. 考察

実施後、障がい者に対する印象は「暗い感じがある」はより否定的な意識の傾向を示したが、「付き合いは面倒」や「一緒にスポーツをすることは困難」、「一人では何も出来ない」、「かわいそうだ」は否定的な意識が減少傾向を示し、「スポーツの実施は危険である」は否定的な意識の傾向が肯定的な意識の傾向に変化を示した。また「生活するのが難しい」は肯定

的な意識から否定的な意識に変化傾向を示した。

内田ら（2013）は、障がいの理解を促進するには、不自由さやバリアばかり着目させるのではなく、支援や工夫によって出来るようになり、活動能力の可能性に気付かせることが重要であると報告している。

本研究は、アイマスクを着用させたブラインドサッカーの体験を通じてドリブルやパス等を成功させるための方法を考え実行する内容であったため、全体を通じて障がい者に対する否定的な質問に対しては否定的

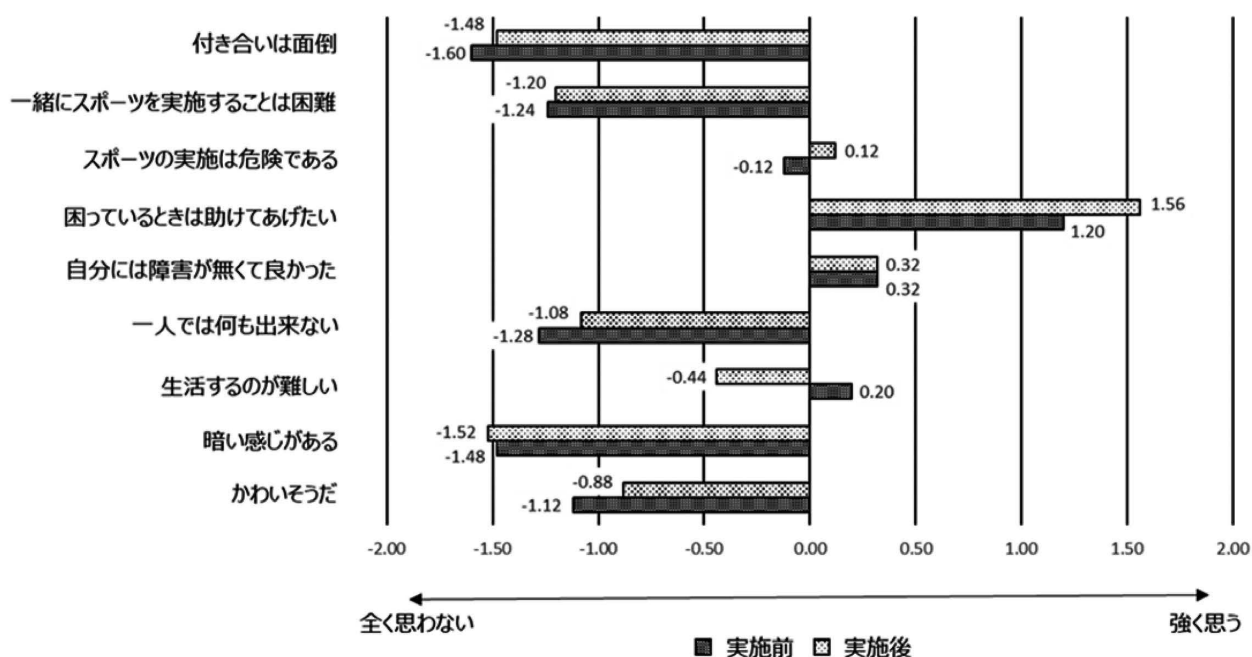


図2. 障がいや障がい者に対する印象

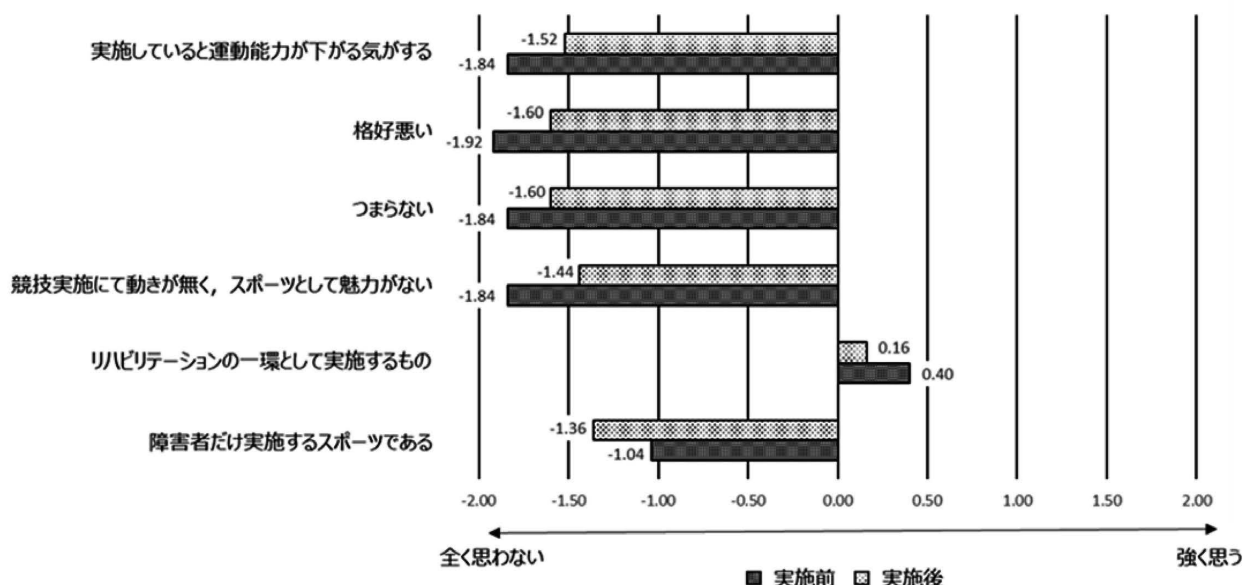


図3. 障がい者スポーツに対する印象

な意識の傾向を示し、「生活をするのは難しい」については肯定的な意識の傾向から否定的な意識の傾向に変化を示したと考えられた。しかしながら、障がい擬似体験下での運動動作の困難さや恐怖感を身にしたことで障がい者に対する否定的な質問に対し否定的な意識は減少傾向を示し、スポーツの実施の危険については肯定的な意識に変化傾向を示したと考えられた。

障がい者スポーツに対する印象について実施後では、「実施していると運動能力が下がる気がする」、「格好悪い」、「つまらない」、「競技実施にて動きが無く、スポーツとして魅力がない」は否定的な意識が減少傾向を示した。また「障がい者だけ実施するスポーツである」は否定的な意識が増加傾向を示し、「リハビリテーションの一環として実施するもの」は肯定的な意識が減少傾向を示した。

障がい者スポーツの実践が障がい者スポーツの印象に与える影響について小玉（2017）は、実施前後における共通質問項目にて障がい者スポーツへの興味、障がい者スポーツに対する否定的な印象が肯定的な印象へ変化する傾向がみられたと報告している。また横尾ら（2009）は、大学生に対しブラインドサッカーを通じ視覚障がい者との交流を実施し障がい者、障がい者スポーツの印象についての変化について検討したところ自由記述にて「コミュニケーションの困難さを感じたが、積極的に図ることで交流を楽しむことが出来た」や「目が見えない分、五感を感じボールタッチの感覚や頭の中でのイメージを高められた」など使用不足部分を補う方法を考えることで、障がい者スポーツに対する印象が変化したと報告している。

また、ブラインドサッカー選手と晴眼者との心肺持久力の比較でブラインドサッカー選手は晴眼者より有意に低かったという報告（松井，2015）やブラインドサッカー選手と晴眼者との筋力の比較でブラインドサッカー選手は晴眼者より有意に低かったという報告（松井，2015）がされている。このことから、ブラインドサッカーの体験実施前においては障がい者スポーツに対する否定的な質問項目に対し否定的な意識の傾向が示したが、実践後は視覚情報が遮断される状況下により通常より慎重な運動動作を生じるため、運動強度の低下を生じざるを得ないため、対象者の中には物足りなさを感じたため否定的な意識が減少傾向を示したと考えられた。しかしながら、障がい者スポーツの実施に際し不足する身体的機能に対し残存する機能をいかに活かし運動の実施に繋げるかを考える思考過程（日本障がい者スポーツ協会，2016）が、他の競技・運動等にも相通じる内容であるため「リハビリテーションの一環としてのスポーツ」に対する肯定的な意識が減少傾向を示したと考えられた。

障がい者スポーツの理解・浸透方法に対する意識では、実施前後ともに質問項目に対し肯定的な意識の傾向であったが、実施後ではサポート体制の充実性や指導者の育成の必要性、障がい者スポーツに関する情報提供は肯定的な意識が減少傾向を示し、障がい者やその家族の理解の必要性や実際に実施（触れ合い）する機会の提供は、肯定的な意識が増加傾向を示した。

障がい者スポーツの普及に関するアンケート結果において小玉ら（2016）は、障がい者スポーツの認知は高いが、実際に障がい者スポーツに関わる経験がない

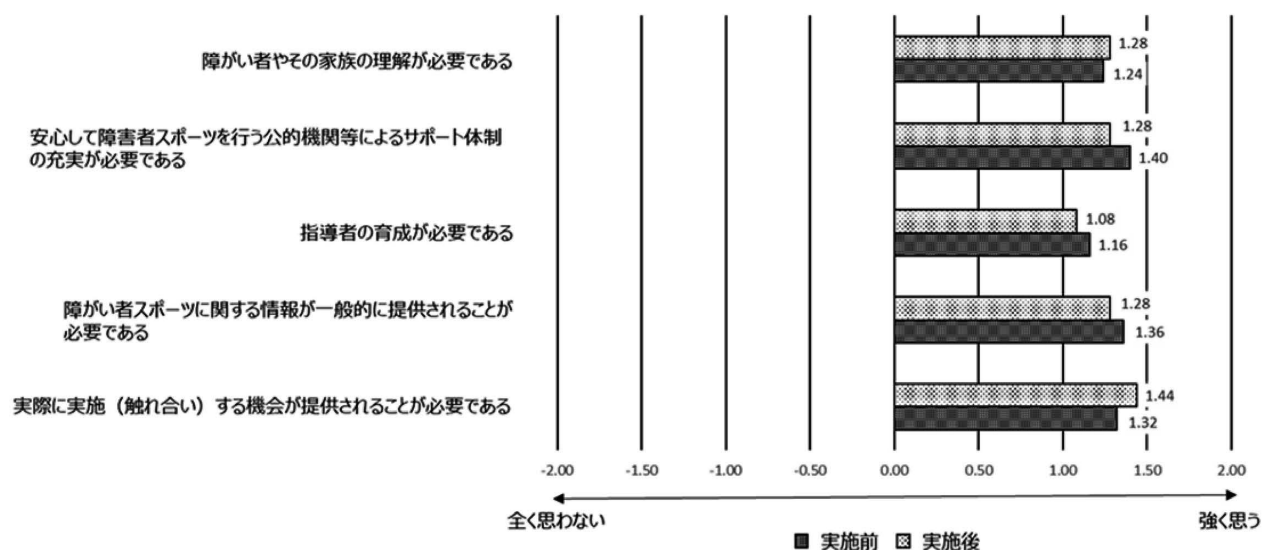


図4. 障がい者スポーツの理解・浸透方法に対する意識

対象者が全体の95%を占めており、その理由として機会がないが最も高かったと報告している。また井上ら(2012)は、特別支援学校高等部の学生保護者に対し障がい者スポーツについてのアンケート調査を行ったところ障がい者スポーツに関心があるものの、機会がない、指導者がいない等の理由で参加していなかったと報告している。これらの報告からも障がい者スポーツの実践活動現場は健常者、障がい者ともに不足傾向にあり、今回の実践を通じて実施(触れ合う)する機会の提供の重要性の認識が高まった結果、肯定的な意識が増加傾向を示したと考えられた。

以上のことから、アイマスクを着用することで容易に障がい擬似体験が出来るブラインドサッカーの体験は、障がいや障がい者の理解・促進に関与し大変有用であると考えられた。しかしながら、ブラインドサッカーをはじめ他の障がい者スポーツを実践する環境や提供が少ない現状であるため、今後の障がいや障がい者、障がい者スポーツに対する理解・浸透させる課題として定期的に健常者や障がい者が共にスポーツを楽しむ機会の提供や環境作りが重要であると考えられた。

参考文献

- 1) 井上由里, 廣岡幸峰, 十田朋也, 南場芳文, 成瀬 進, 小枝英輝, 後藤 誠: 障害者スポーツに関する意識調査の結果. 神戸国際大学紀要, 82, p83-89, 2012.
- 2) (公財) 日本障がい者スポーツ協会 編: (公財) 日本障がい者スポーツ教本 初級・中級. ぎょうせい, p11-12, 2016.
- 3) 小玉京士朗, 早田 剛, 相澤 徹, 河合洋二郎, 村重良一: 障がい者スポーツボランティアに対する意識調査. 環太平洋大学紀要, 10, p237-242, 2016.
- 4) 小玉京士朗: 障がい者スポーツによる学生の意識変化. 平成28年度環太平洋大学学内特別研究費報告書, p63-68, 2017.
- 5) 松井 康: ブラインドサッカー選手の筋力に関する研究-晴眼者との比較-. 筑波技術大学テクノレポート, 23 (1), p187-188, 2015.
- 6) 松井 康: ブラインドサッカー選手の心肺持久力に関する研究-晴眼者との比較-. 筑波技術大学テクノレポート, 23 (1), p189-190, 2015.
- 7) 松尾哲矢, 依田珠江, 河西正博, 和 秀俊: 車椅子運動が子どもにもたらす生理的・社会心理的効果に関する研究. 笹川スポーツ研究, 2 (1), p222-229, 2013.
- 8) 永浜明子, 藤村弘子: アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告 (第I 報). 大阪教育大学紀要, 60 (1), p39-40, 2011.
- 9) 永浜明子: アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告 (第II 報). 大阪教育大学紀要, 60 (2), p31-44, 2012.
- 10) 日本ブラインドサッカー協会: <http://www.b-soccer.jp/> (2017年11月15日閲覧).
- 11) 大山祐太, 奥田知靖, 福原崇之, 越山賢一, 高沢拓也, 沢永宣之, 中川和彦, 佐藤 徹: 「アダプテッド・スポーツ」体験イベントの実践報告: 大学・自治体・民間が連携した事例. 北海道教育大学紀要, 67 (1), p441-455, 2016.
- 12) 大山祐太: 大学の一般体育におけるアダプテッド・スポーツ実践の教育効果. 北海道教育大学紀要, 67 (2), p267-276, 2017.
- 13) 佐藤広之: 地域障害者スポーツの普及. Journal of Clinical Rehabilitation, 21 (8), p763-769, 2012.
- 14) 高橋宏和, 平田知之, 東城徳幸, 小澤富士男, 亀村ひかり, 横尾智治, 山田耕太: クラブ活動での教え合い・学び合いによる自己成長-サマースクールなどの社会貢献事業の中で-. 筑波大学附属駒場論集, 52, p101-108, 2012.
- 15) 内田若希, 大谷まや: 障害者スポーツ実習と障害疑似体験における障害理解の差異の検討. 障害者スポーツ科学, 11 (1), p33-41, 2013.
- 16) 横尾智治, 八宮孝夫, 牧下英世, 鈴江智彦, 岩崎彰治, 浅井 武: ブラインドサッカーによる視覚障害者と健常者の交流. 筑波大学附属駒場論集, 49, p175-180, 2009.